

Natural Historyの訳語として当初、博物誌・博物学とあてられていたものが、次第に「自然誌」「自然史」と訳されるようになり、今では自然関係の図書のタイトル中に数多く見受けられるようになってきたことを前号でお話しました。

この「自然誌」「自然史」ということばはいつ頃成立したのでしょうか。前号で、「自然史」は戦後ではないかという鶴田総一郎氏の意見をご紹介しました。『自然科学と博物館』(国立科学博物館 Vol.41 No.4 1974)本当にそうなのでしょう。そこでタイトルとして使われ始めた時期をネット検索してみました。すると、「自然誌」「自然史」を含む書名をもつ図書は、概ね1970年代に入ってから散見されるようになり、1980年代になると急激に増加してこの20年間で、それぞれ150点以上もの図書に使われていることがわかりました。検索した範囲で最も古いものでは、「自然誌」が1952年に刊行された『房総の自然誌』(古今書院)で、「自然史」の方は更に古く1923年に『人類自然史』(内外出版社)というタイトルで出版されています。この検索結果から「自然史」は少なくとも大正時代末に、「自然誌」の方は昭和20年代末にはタイトルに用いられていたことがわかりました。

Natural Historyの本来の語義からすればHistoryは<物語><叙述>であるからしてHistoryを<歴史>とみる「自然史」という訳語を与えるのは不相当だという駒井卓氏らの主張『自然科学と博物館』(国立科学博物館 Vol.35 No.1-2 1968)などから「自然誌」の方が「自然史」に先行して成立していたものと勝手に思い込んでいたのですが、実際は逆だったのかもしれない。速断は避けねばなりません、Natural Historyの訳語としてこれまで博物誌・博物学とあてられていたのが、ある頃から文字通り「自然史」という訳語があてられることが目立ってきた。そこで博物学の事情に精通した研究者からは、本来の語義からすると「自然史」ではおかしいのではないか。それを言うならむしろ「自然誌」ではないのかと異論が出た。出たけれども、いったん「自然史」として成立すると、それは単に自然の記述を意味するとされる「自然誌」よりも、自然を時間的推移、歴史的視点からとらえた時には「自然史」の方がより正確にその内容を表現できるとして受け入れられるようになったと考えられないでしょうか。

このNatural Historyは「自然誌」なのか、それとも「自然史」なのかという問題は現在でも議論されています。前千葉県立中央博物館長の沼田真氏は、Natural Historyは本来の語義からして自然誌とすべきと主張されています。『自然保護という思想』(岩波書店1995)一方、糸魚川淳二氏は、自然それ自体が地史的時間の経過の中で成立してきたものであることを考えれば自然史の方が自然誌よりふさわしいとしてしています。『自然史学のこれからと博物館』(月刊地球 Vol.13 No.11 1991)

同じNatural Historyの訳語として生まれた「自然誌」「自然史」ですが、現在ではその意味するところはかなり違ってきていると見なければならぬようです。由来からすれば、Natural Historyの訳語としては「自然誌」がふさわしいかもしれません。ただ、Natural History自体が近代以降の時間を軸とした進化思想の波の中で自然史的傾向を強めてきたことも事実でしょうし、その意味では「自然史」の登場は当然であったのかもしれません。

「自然誌」「自然史」を冠した図書の出版点数が80年代以降増大したのは、自然に対する関心の高まり、ことに近年の自然保護・保全の意識の広がりがある要因としてあげられるでしょう。実際に多用されていることばでありながら、「自然史」は一部の国語辞典にしか収録されず、「自然誌」に至ってはほとんど無視されています。この辺りで「自然誌」「自然史」の語義・用法の定義をして、これらのことばに正当な評価を与える必要があるのではないでしょう。

(司書 内田 潔)

**特別展のお知らせ**

**サルがいて、ヒトがいて  
一野生動物との共存を考える一**

平成12年7月15日(土) - 9月3日(日)

近年、野生動物をめぐる状況はきびしく、生活できる自然が少なくなっています。この結果、農作物への被害など人との問題も増えています。神奈川県内のニホンザルもこの例にもれません。

特別展では、野外観察体験を通してニホンザルの生態を学び、サルと人との共存のあるべき姿を考えます。

● From EDITOR

新年度、初号をお届けします。

この4月より横浜国立大学の青木淳一教授が当館の新館長になりました。近々、本紙に青木新館長も執筆予定です。

7月には、特別展が開催されます。野生動物、とくに身近なサルに焦点をあてています。関連して今号には、早稲田大学の長谷川真理子先生にご寄稿いただきました。

また、夏休みには開館からの入館者が20万人に達成する予定です。

**催し物のご案内**

**特別展関連講演会!**

「霊長類の行動進化」[博物館講義室]  
特別展に関連して、「霊長類の行動進化について」解説します。

日時:8月5日(土) 13:30~15:00

対象:一般 70人

講師:長谷川真理子氏(早稲田大学教授)

申込:7月4日(火)~7月25日(火)

**室内実習「アニマルトラッキング体験」**[博物館]

電波発信機を使って動物を探す方法を体験します。

日時:8月6日(日)・12日(土)・13日(日)

各回2時間程度

対象:小・中学生10人程度

申込:当日受付

**博物館スクール**

室内実習「化石探索」[博物館ほか]

日時:8月19日(土)・27日(日) 全2回

10:00~15:00

内容:化石採集が身近なところで行うことを解説し、自分で探す方法を学びます。

対象:小学生以上20人

申込:7月18日(火)~8月8日(火)

**博物館スクール・子ども講座**

室内実習「サルを知ろう」[博物館]

日時:8月20日(日) 10:00~15:00

内容:特別展の展示を使い、サルから人への進化を学びます。

対象:小・中学生20人

申込:7月18日(火)~8月8日(火)

**博物館友の会・神奈川地学共催**

室内実習「鉱物の産状と組合せ」

[博物館講義室]

日時:9月24日(日)、10月9日(月・祝)・14日(土)・28日(土)、11月3日(金・祝)・11日(土)、12月9日(土)・23日(土)

全8回 10:30~15:00

内容:鉱物の産出状態と、その中の鉱物の共存関係について解説します。

講師:加藤昭氏(国立科学博物館名誉研究員)

対象:一般 70人 受講料:4,000円

申込:8月22日(火)~9月12日(火)

**特別展関連講演会**

「野生動物との共存について」

特別展に関連して、野生動物との共存について解説します。[博物館講義室]

日時:8月26日(土) 13:30~15:00

対象:一般 70人

講師:羽山伸一氏(日本獣医畜産大学講師)

申込:7月25日(火)~8月15日(火)

**申込方法**

往復はがきに、催物名、住所、氏名、年齢、電話番号を明記の上、博物館宛てにお送りください。

ご家族など数人でご希望の場合は連名でお申し込みになれます。特に記載の無いものは参加無料です。応募多数の場合は抽選となります。当館のホームページもご参照ください。

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp/museum/g.html>